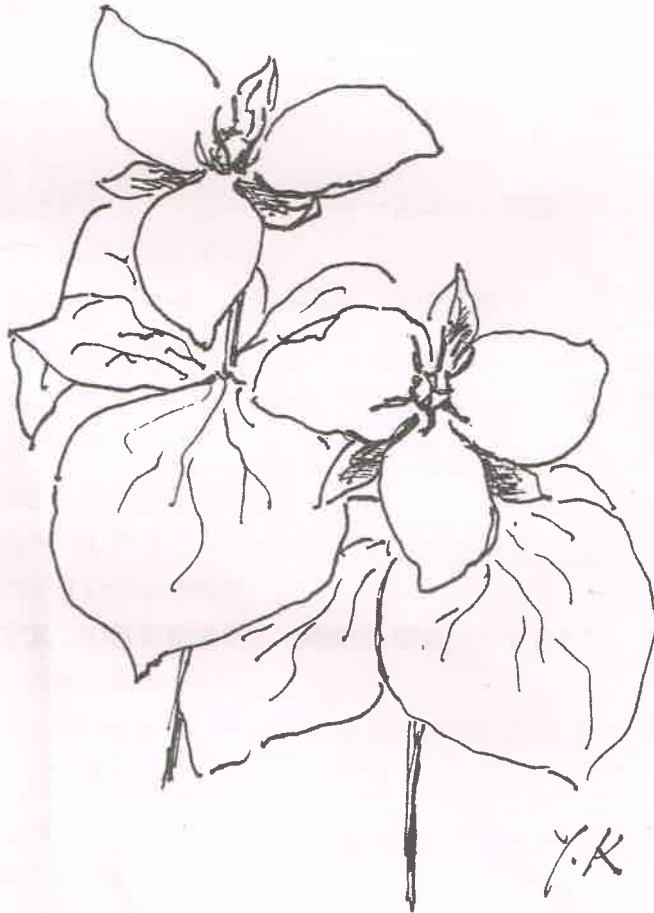


# エゾアツ



20周年記念 特別号

北海道ボランティア・レンジャー協議会

## 目次

## <エゾマツ> 特別号

### ≪ 20周年をふりかえり、新たな発展をめざして ≫

- 1 結成20周年の想い 会長 田村 允郁
  - 2 野幌森林公園事務所からお祝いのメッセージ
    - ・北海道ボランティア・レンジャー協議会 結成20周年に寄せて  
野幌森林公園事務所長 相馬 博明
  - 3 顧問からのメッセージ
    - ・森の生態をながめて 大友 健
    - ・北海道ボランティア・レンジャー協議会設立20周年記念を迎えて  
佐々木幸夫
    - ・北海道ボランティア・レンジャー協議会に感謝して 佐藤 健一
    - ・忘れてはならない昔の話 川端 功治
  - 4 20周年記念事業 — 写真展 講演会報告
    - ・20周年記念事業報告 田村 允郁
    - ・ <20周年記念、五十嵐恒夫氏、大橋弘一氏の記念講演から>
    - ・キノコは森のコーディネーター 五十嵐一夫
    - ・野鳥から北の自然を学ぶ 荻野 裕子
  - 5 会員からの報告など
    - ・森づくりいろいろ回想 大友 健
- <写真 20周年記念事業 観察会・研修会スケッチ>**
- ・植物とのお付き合い 北原 武
  - ・ボランティア・レンジャー協議会20周年について考える
    - 南部 栄一
    - ・自然解説員として 小泉 三雄
    - ・自然への想い 小山賢一郎
    - ・シギゾウムシのこと 谷口勇五郎
    - ・閑話休題 佐々木幸夫
    - ・「子ども樹木博士」設定と、おもしろ森林もり遊び 小林 文男
    - ・西岡水源地自然観察会 室野 文男
- 6 論文 ・十和田カルデラ火山奥入瀬溪谷 成田 伸一
  - 7 本の紹介 広報部
  - 8 自然観察NOW 編集後記

〔主 張〕

## 結成20周年の想い

会 長 田 村 允 郁

1986年に第一回ボランティア・レンジャー育成研修会が支笏湖畔で開催され、修了者の皆さんが組織体として活動していこうとの趣旨で当会が結成されて、今年で20年の節目を迎えました。広報誌やその他の資料を調べてみると、一回目の修了者の方々8名が会員として現在も当会の活動に携わっておられますことに敬意を表したいと思います。

会の活動は、結成の翌年1987年6月1日に、広報誌「エゾマツ」1号が発行され、途切れることなく年4回の発行のペースで現在に至っていることには引き継がれてきた担当者と情報を寄せられた会員、さらには会員全員の当会に対しての熱意が感じられます。

自然観察会についても1987年6月7日に最初の観察会が野幌森林公園大沢口にて開催されています。今とは違い当時は観察会を主催する団体はほとんどなく、当会の先駆的な活動に当会の歴史の重みを感じます。

結成20周年にあたって、10年前の十周年事業での「自然観察ガイドブック」作成のことが思い出されます。作成委員の一人として資料の収集や執筆、編集に多くの時間を費やしましたが、そこには、会員の協力が様々な場面でありました。資料や写真の提供、校正や監修に親身になって携わっていただいた会員もいました。このように、当会の自慢できるところは、会員が常にボランティア精神で活動を支えてくれていることです。この精神が20周年を迎えるにあたっても継続していることに心より感謝いたします。

結成20年を迎え、最近では観察会のあり方にも変化が生まれています。それは、多くの会員がガイド役を積極的に引き受けてくれることです。このことは会員の資質の向上という側面からも評価したいことです。

地方の活動に目を向けても、小樽支部やオホーツク支部の定期的な活動も精力的に実施されていたり、例年、東大演習林での研修会や鶴川の研修会では地元の会員の方々のお世話をいただき実のある研修会になっています。

現代は情報社会とか多様化の社会とかと言われています。会員の皆さんとの情報の共有や当会の活動を会員の皆さんの多用な発想の中で考えをまとめたり、さまざまなニーズに対応する活動計画を立案し行動に移すことが、次の節目である30周年に向けての大きな課題と受けとめています。当会のよき精神風土のボランティア精神をさらに磨いていきましょう。

## 北海道ボランティア・レンジャー協議会 結成20周年に寄せて

北海道野幌森林公園事務所長 相馬 博明

北海道ボランティア・レンジャー協議会が、今年、結成20周年を迎えましたことに、心からお祝いを申し上げます。また日頃から、野幌森林公園の管理・運営にご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

野幌森林公園が道立自然公園に指定されて、今年で38年目となりますが、この間、野幌森林公園の歴史の半分以上をボランティア・レンジャー協議会の皆様方と共に歩んできたこととなりますが、これも偏に皆様方の当公園を愛し大切にするという思いがあったからこそと改めてお礼申し上げます。

昨今、「自然保護」、「環境保全」という言葉はすっかり定着した感がありますが、その反面、身近な自然が少なくなっていることも事実です。そうした中で、多くの方々に自然の尊さを理解していただき、そして、自然とふれあう楽しさを学んでもらうため、貴協議会と公園事務所との共催で、四季を通しての自然観察会を開催しているところです。

自然観察会に参加した多くの方々からは、「満足した」、「身近な自然にも興味を持つようになった」、「違う季節の自然の姿も見てみたい」といった感想が寄せられており、この観察会が「自然を楽しむきっかけづくりの場」として大きな役割を果たしているものと確信しております。このような感想をいただけるのも、貴協議会会員皆様方の日頃からの研鑽のお陰と感謝している次第です。

さて、平成13年春に、「人と自然のふれあいの場」、「人と人とのふれあいの場」として開設された「自然ふれあい交流館」は、平成19年度から指定管理者に管理・運営を委託することになります。

今後ともこの交流館を拠点にして四季折々の森の姿を楽しんでいただき、多くの皆様により一層に親しまれるように努力して参りたいと考えておりますので、引き続き貴協議会のご協力を宜しくお願いします。

札幌という大都市近郊に存在する貴重な野幌森林公園は、豊かな自然を楽しむきっかけづくりや気軽に自然に触れることができる場としてその重要性はますます高くなってきており、「自然と人の橋渡し役」として貴協議会の活躍が期待されております。

最後になりましたが、北海道ボランティア・レンジャー協議会の益々のご発展と皆様のご活躍を御祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

## 森の生態をながめて

札幌市 顧問 大友 健

先般「エゾマツ」(76号) 春季号にて川端会長さんが叙勲された旨の記事があったので、先ず会長さん始め会員の皆様にお喜び申し上げます。

私は現在病氣療養中で老人保健施設に長期入所して休会をしており「エゾマツ」を通じ皆様のご活躍に敬意を表しております。

私は森林環境と向き合って50年以上になり、いろいろな感動を味わって、人々に皆様同様自然のすばらしさをお伝えてきました。森林環境のすばらしさは、そこに棲息する動植物に多大な活力を与えるものです。森林の構成はよく見ると大、中、小の樹木が群状に成立して上、中、下の樹高により樹冠をつくり太陽光線を下層の植物に与え、いわゆる木漏れ日が豊かでもあり、他に見られない植物層が増殖する結果になり、林地面に湿原を生み溜水をつくり、そこに湿性植物だけの世界を見せる事もあり、高、中、低層湿原とそれぞれの姿も見ることができます。安定した森林生態系こそ森林の多面的機能を充分に発揮し国土保全に寄与する自然力になります。

森林機能の破壊は人間の伐採、気象条件の厳しさに樹冠が破壊され生態系の安定は破られ活力のない森になり人力により復元をせねばならない事が多く私自身、先頭に立ち笹を枯殺して、シラカバを天然更新させる手法を実施したこともあり、ヘリコプターによる枯殺剤を空中に撒布したのです。その後、山中に大雨が降り、川水汚染を起し、ヤマベの養殖池に流れ込み魚が死んだりして、新聞やら地元関係者に責任を追及されたこともあり忘れることができない一件もあります。このことから農薬の使用は中止されブルドーザーによる地はぎを行い、土壌を露出させる新たな手法に今はなりました。

今は森林から機械の音が全くといってよい位に消え、自然資源は間伐育成による場に凶られており、資源の活用も最大限に凶られるようになっており、森林機能はそれなりに高まっています。

皆様が行っている森林観察会を実施する団体は他にもあり、私も加入しておりますが、「エゾマツ」同様これらの団体から「会報」が送られてきますので、誌上より仲間の活動に敬意を表しています。

何時の時にか森に入る機会をと祈りつつ歩行リハビリに頑張る日々です。何時か森を歩けるようになったら皆様にお会いして改めて協議会に活力を下されたお礼を申し述べたく思っています。

末筆になりましたが、今後の会の発展のために会員の方々と行政が協力し主催行事をどんどん発展されるよう祈念致します。

北海道ボランティア・レンジャー協議会設立20周年記念を  
迎えて（固有名詞での思い出）

札幌市厚別区 佐々木 幸 夫

早いもので私たちの協議会が20周年を迎えたとのことで、今更ながら感慨をあらたにしている昨今です。と、同時に先輩各位ならびに現会員の、組織・運営に対する協力と努力の結晶が、今日の協議会の姿であり、さらに、これを機に今後ますますの充実した協議会の発展を会員の一人として、心より願うものです。

私が協議会に入れさせていただいたのは、第4回ボランティア・レンジャー育成研修を受講した平成元年(1989年)でありますから、すでに18年を数えることになり、年齢も70の半ばとなりました。

あらためて、過去を思い出しますと、まさに走馬灯のごとくその思い出の数々が脳裏に浮かんできますが、この間に、ご他界された1代目会長の川村千束さんを始め、現役会員としてご活躍され方々に、深く哀悼の念と感謝を申し上げます。

協議会の設立1年目は、エゾマツ会と称したのですが、2年目から今日の北海道ボランティア・レンジャー協議会という名称に変わりました。しかし、会報には、そのエゾマツ会を記念して「エゾマツ」という誌名が残され、今日に及んでいます。

会員になった当時はまだ現役の道職員でしたが、幸か不幸か閑職にあり、仕事の合間に協議会の仕事もさせていただきましたので、当時の会長・副会長から協議会の実態を聞かされ、役員会にもオブザーバーとして出席されるよう要請があり、断りきれずに出たところ一人の役員から直接私に「何故、役員でもないのに出席しているのか」と、問いかけられ困惑したこともありました。

いずれにしても、今日と異なり、自前で自然観察会の案内が出来る会員が少なく、川村会長も大変なご努力をされておりました。そのうち、会長が病魔に襲われ急遽入院することになり、その9月に従来道庁自然保護課と森林公園事務所が、実施していました秋の自然観察会を協議会で行うことに決まり、当時の研修部長でした住吉光子さんが中心になり、「野幌自然観察の集い」と称して実施することになりましたが、会長不在で計画・立案・実施と先頭に立ち、多忙を極めた結果、体調を損じ入院することになり「家人からボランティアとはそんなに、体を壊してまでもしなければならぬのか」と言われ、それを機に脱会することになりました。

協議会の中核的人物が、急に辞めるとのことですから、重大なことです。病

床にある会長に話して良いものか、どうか悩みました。しかし、事は重大であり、やむなく話しましたら「自分がなんとか翻意させるから心配するな」とのことでしたが、快癒することなく他界されました。惜しい人でした。

その後を副会長をされていました大友健さんがつがれましたが、まだ協議会は黎明期にあり、いろいろとご苦勞されました。しかし、その大友さんも、病魔に見舞われ、いま懸命にリハビリされていることと思います。

この間、岩見沢の当時研修部長をされておりました山口慶彦さんが、懸命に研修部門の責任者として頑張っておりましたが、やはり過勞が祟ったものか、病床に臥し、ついに帰らぬ人となりました。

また、協議会に貢献度の高い広報部長をされておりました滝谷尚弘さんも、平成8年の終わり頃か、平成9年年頭に亡くられました。本当に惜しい人たちが、次々と他界されたのです。

また、日月賢史・智美ご夫妻にからんだことにつき、協議会ではかってない問題を抱え、関係会員には大変ご迷惑をかけました。この時、傍観的見方をされていた会員もおりましたが、当事者としてはそのような事態でなかったことを、あらためて時間が経過した段階で、痛感されますと同時に、直接の関係者各位に多大なご迷惑をおかけしたことにつき、深くお詫び申し上げる次第です。

そして、平成11年から前会長の川端功治さんが、第3代目の会長さんに就かれました。

ご高齢にもかかわらず、常に私たち会員の先頭に立ってご教導くださいました。6期12年間、川端さんの念頭には「会員の会員としての、レベルアップを如何に図るか」にあったと思います。ですから、自然観察会の下見・本番を通し、種々の資料をコピーとして配付されました。経済的負担も大きかったものと容易に推定されます。本当にありがたく、感謝に耐えないところですが、昨年これらの活動を含めた、社会への貢献が認められ、瑞宝小綬章を受勲されましたことは、慶びに耐えません。今後のさらなる健康をお祈りし、これからは顧問として、私たち会員に対しご教導くださるようお願いするところです。

そして、第4代目会長として、川端さんの良き補佐役を勤められました、田村允郁さんが就かれましたので、私たち会員はこぞって新会長を中心に、さらなる協議会の発展を期しましょう。

このような経過を踏まえ、20周年の節目を迎えましたことにつき、いろいろな思い出があり、万感胸に迫るものがあります。

幸い協議会は、その人材は、綺羅星のごとくおりますし、今後の新会員にも期待するは大でしょう。

また、協議会が今日あることは、部外者にもご協力を願いました。その人は当時、北海道野幌森林公園事務所公園利用課長であり、現在野幌酪農学院大学教授の村野紀雄さんです。

当時、野幌森林公園のフィールドは、自然観察指導員が主に使っていましたが、私たち協議会のメンバーは、道の環境部が育成しているボランティア・レンジャーであるから、当然道立自然公園である野幌森林公園を使用すべきであり、大いに活用して、ボランティア・レンジャーとしての実をあげられるよう望まれました。その行為に感謝しております。

そのような環境のもとに、つねづねボランティア・レンジャーとして恥じない会員でなければと思っておりますが、過日の会報78号秋季号に掲載されていいた谷口勇五郎さんの「自然ガイドを考える」に、学ぶべき点が多くありました。私も同じ思いで、常に初心に帰って自然と人との橋渡しに徹したいものと願っています。

(2006. 11. 07 記)





## 北海道ボランティアレンジャー協議会に感謝して

札幌市 佐藤 健一

わたくしがボラレンに入会のきっかけになったのは親父に拠るところが大きい。子供の頃我が家の裏に、赤く錆びた半月状の大きな鋸が2枚ありました。山形県酒田の米作り農家の次男だった親父は、元号が明治から大正に変わった頃、岩見沢の親類を頼りに渡道その後千歳の辺りで樵をしていたそうで、その時使っていたものだと親父かから聞かされました。

親父は遠くに見える木の名前が判ることや草花の名前をよく知っていたが、こちらは全く興味なし、何でつまらない木や草の名前を知っているんだろうと思っていました。その頃は戦時の食料難、腹の足しに近くの沢でザリガニを捕り、ゆでて真っ赤になったのをガリガリ食べたり、半日かけて採った籠一杯のカタクリの葉っぱは、ゆでるとほんの少しなのでガッカリしたり、ミズバショウは蛇の枕だコチキショウとばかり悪戯鬼一同で泥まみれで踏みつけ全滅させて大威張り、今ではシンジラレナイーことをしたものでした。

また当時はみんな栄養不良、転んでけがをするとすぐ化膿しオレもオマエも友だちはみんな、がんべ（おでき）だらけでした。

小学校から国民学校に名前が変わった学校の授業には畑づくりがあり、疲れると鋸を放り出して先生も生徒も腹減った「白いめしが食いたいなー」と青い空を眺めたものでした。そのようなわけで食べら山の木や草の実以外は遊びで征伐の対象でした。

さて横道にそれてしまいましたが、草木が大好きだった親父は昭和44年ごろ室蘭文化女子短大の先生で鷺別に住んで居られた原松次先生(注)の所に時々伺っては先生のお話を聴いていたようです。

たまに帰省した時、親父と一杯やると、ひよいと話題が原先生のことになったりし、先生の植物に関する知識に敬服してました。オマエも酒ばかり呑んでいないで木や草の名前のひとつや二つ覚えてみる、少しは森の面白さがわかるぞ、と諭されたものでした。というわけで 親父が死んでからボラレンに入会させていただき、多くの先生やボラレンの先輩や仲間に教えをいただきました。おかげ様で森のすばらしさや楽しさを少しはわかるようになりました。北海道ボランティアレンジャー協議会に感謝すると共に会の諸先輩、仲間に感謝し今後益々の発展を祈ります。

(注) 大正6年川崎市生まれ 東京植物同好会で牧野富太郎先生に師事  
昭和19年北大卒 館脇操先生に師事  
著書 北海道植物図鑑、室蘭の植物その他

## 忘れてはならない昔の話

顧問 川端 功治

頃は昭和 18 年(1943 年)今から 50 年余の古い昔話であります、私にとっては忘れる事の出来ない事件が発生した時の事であります。その時私は倶知安営林署の新米署員であつたが北大の恩師から至急電話が入り「川端!!黒松内の天然記念ブナ林が盗伐されているぞ、早く何とかしないとお前の首が飛ぶゾ」。大変な剣幕の電話であつた、私は現地に向かったが、私ならではの作戦で現場には行かず部落の民情や情報を集め次のような決断を下した。

黒松内地方は北海道の中部と南部を繋ぐ海溝のような低湿地帯で農作物は毎年のように凶作で出稼ぎが本業の農家はひたすらに天然記念物のブナ林の払い下げを陳情懇願し続けてきた。そこに戦況利あらず、外地からの引揚者が混入して混乱は拡大した混乱となり、地方行政が乱れた。その結果についてのすべては町村行政が責任を負うべである。不可抗力によって起きた事故については其れなりの処置もあろう。と宣言して現地の森林監視人「特別司法警察員」が不法伐採を阻止出来なかつた不甲斐なさを嘆きしよ気ているので、励まして帰署。事の顛末を復命したところ署長は「君はやり過ぎた」と嘆いて黙りこんでしまう始末。

そこえ軍用材として黒松内の天然記念物ブナを伐採、航空機用に採材して江別や千歳に発送するようにと軍からの指示を伝えてきた。雑情報として江別は製紙工場に特攻機を作らせ、千歳には模擬飛行機を作り飛行場の周囲に並べ、敵機を威圧して錯誤の攻撃してくるのを高射砲で打ち落とす作戦との事。あまりにも負け戦らしい情報にガックリしたことを覚えている。

この情報に喜んだのは黒松内の農民。軍用材の採材後の末木枝条は農民が独占出来るからと期待した。ところがそこえ例の北大館脇操教授から至急電話が入り「川端君今度は君に心配を掛けないから黒松内天然記念物に関する行動を全て中止せよ。次の連絡を待て」と。そして次に来た連絡は「天皇陛下は世界の人類の為の研究に黒松内のブナ林は大切に保存せよ」とのご指示が出たと電話がはいり、喜び勇んだ館脇先生の其の声が今でも私の耳底に残っている。

私の忘れてはならない事とは「黒松内のブナ林は人類の大切な遺産であることを強調した昭和天皇のお言葉」であり、この事から黒松内の行政や関係機関の態度が急変して、中央官庁の支援もあり、黒松内町民は自然観察指導員の養成に、ブナセンターの建設、その他必要な構築物の獲得に多大なる功績を残した町民パワーは絶賛に値する。

これ等の功績に比べ、私の独断処理した司法事故処理は、チッホ<sup>o</sup>ケな処理ミスとして忘却の彼方に消去して仕舞いますので宜しく。

## 20周年記念事業の報告

17年度より計画をすすめていた20周年記念事業は、役員担当者ならびに会員のご協力により写真展、会員研修会、記念講演会が無事終了致しました。綿密な計画によって、どの事業も盛会裏におこなわれましたことに、改めて、会員の皆様にお礼申し上げます。これらの事業が当会の活力となっていくことでしょう。

### 写真展 9月2日~9月30日 野幌森林公園 ふれあい交流館

女性役員、今村ひろ子さん、内山恭子さん、熊野美子さんによって企画運営されたこの写真展は、会員のご協力によって24点の作品が各地の会員のみなさんから寄せられました。

期間中、ふれあい交流館を訪れる来館者が興味深く出展作品を鑑賞している姿を見て、このような企画を今後も続ける必要性を感じたりもしましたし、会員の特技や趣味の発表の場を作ることの意義もあるようにも感じました。

作品には、山などの自然風景、興味深い植物やキノコのマクロ写真、迫力あるヒグマやエゾシカの生態写真等々が並べられましたが、出展者の自然を見る目の鋭さや優しさが満ちたものでした。



この写真展を担当された三人の女性役員の準備、設営、後始末、作品搬送等の御苦勞に敬意を表したいと思います。

### 会員研修会 9月18日 野幌森林公園 ふれあい交流館



野草や樹木についての研修会は、何度か行われていますが、20周年事業として会員の皆さんにとって意義のある内容は何かを検討して来ました。その結果、キノコについての研修事業を行うこととしました。

講師につきましては、道内ではその第一人者である、五十嵐恒夫先生に依頼することにしました。当会副会長の五十嵐さんに折衝をしていただき、快く引受けていただくことになりました。

研修会当日、会場一杯の41名が参加され、会員の皆さんの関心の深さが伺えました。日程は午前中は室内での研修、午後は野外での研修でしたが、午後はいにくの雨となりましたが、興味ある話で参加者を魅了しました。

先生は、話しの冒頭、生物界を5界に分類すると、キノコは動物界、植物界、と対等な菌界に属することを強調されました。そして、キノコは「森の分解者」との言い方よりも、森の生態系を支える「森のコーディネーター」であるとのことをお話をいただきました。

## 講演会 10月9日 かでる2・7

当会の活動を一般の人々に知ってもらうためと併せて会員の資質向上のための事業として、講演会を企画しました。役員の荻野さんを窓口依頼講師を検討して、野鳥及び北海道の自然をテーマとしている写真家、大橋弘一氏にお願いすることにしました。多忙にもかかわらず講師を引受けていただきました。

当日は、定員一杯の百名を超える参加者が集まり、関心の深さが感じられました。

大橋弘一氏は、自分のテーマは二つあり、一つは日本の野鳥であり、二つ目は北海道の自然であるとの話しから始まりました。具体的な例を出しながらの話しに興味は尽きませんでした。講演のまとめの部分で、自然環境を知り、思いをはせることが、環境保全につながるのと指摘は、私たちの活動に示唆を与える言葉でした。



写真展、研修会、講演会と、20周年記念事業は盛り上がりのある行事となり、会員の皆さんの参加協力で改めて感謝申し上げます。

この後、残された事業の「エゾマツ」20周年記念号は、広報部によって作成される手順になっていて、12月中には、会員の皆さんのお手元に届けられることになっています。「自然観察ガイドブック」については、19年度中に完成させるべく努力していて、作成作業を進めています。

当会が20年という節目を契機に、次の30周年に向けて、心を新たに自然環境保全のボランティア活動の歩み着実に進めて参りましょう。

## キノコは森のコーディネーター

～ボラレン 20 周年記念会員研修会～

副会長 五十嵐一夫

私事ですが、私の父のふたつ下の弟が五十嵐恒夫、周りの人は五十嵐先生と呼んでいるけど、私にとっては恒夫おじさん。親戚のよしみで図々しく講演をお願いしたところ、甥っ子の私が勝手に想像していたほど先生は暇ではなく、9月に空いている休日は9月18日だけだった。パソコンとプロジェクターを駆使して始まった講演のテーマは「森林とキノコ」。森林の話しあれこれから講演が始まりました。

さて、どういう条件で森林が出来るのでしょうか。乾燥がとて強ければ砂漠、少し雨が降り、寒いところではステップ、暖かいところでは棘低木林（サボテン）、もう少し雨が降るとサバンナとなりますが、森林にはなれません。森林が成立するには、雨と温度が必要です。日本はとて恵まれていて、全国で森林を見ることができます。

では、世界各地でどのような森林があるのでしょうか。熱帯多雨林から始まり、亜熱帯多雨林、照葉樹林、落葉広葉樹林、落葉針葉樹林、常緑針葉樹林。色々な森林がありますが、これ以上寒くなるとツンドラと言って背の高い木はなくなります。

北海道では、大別すると落葉広葉樹林と常緑針葉樹林がありますが、これらが混ざり合った針広混交林というものがあります。黒松内のブナ林から東側がこれに当たります。同じ森林が千島列島、樺太、ロシア、朝鮮半島の付け根部分にも広がっており、館脇操先生が汎針広混交林帯という論文を書いています。

知床が世界遺産に登録される時、審査員が来ることになり、森林の説明をやらされました。実はロシアには知床など問題にならない規模の森林が世界遺産に登録されていて、同じ森林帯に世界遺産がふたつも必要なのかという話になってしまいます。当然この質問を予測して準備しました。知床の森林を群落的に解析した結果を説明し、世界的にも類を見ないものであると説明したところ、説明が終ったとたんに予想した質問をされました。ロシアの世界遺産とどう違うのだという質問でした。あちらにはトドマツが無く、主な樹種はチョウセンゴヨウ、知床の主要樹種はトドマツでチョウセンゴヨウは無い。林床植物はこちらが笹、ロシアには笹が無い。群落的に相当違うという説明を

したところ、森林のことについては、それ以上の追求は無く納得したようでした。同じ森林帯であっても樹種が違うことがあります。

これから紅葉の時期になりますが、北海道を代表する木にエゾイタヤがあります。エゾイタヤは秋になると葉っぱが黄色くなります。海外学術調査で1ヶ月ほどロシアを調査したことがありましたが、向こうではエゾイタヤが真っ赤に紅葉していました。たまたまその年にソウルの大学の樹木の先生が私の研究室に留学していて、帰ってきてからその先生に朝鮮半島のエゾイタヤは赤くなるか黄色くなるかと聞いたところ、しばらく考えてから両方あると答えられた。北海道は黄色、旧満州は赤、中間にある朝鮮半島は両方、大変興味深く、調べるのも面白いと思ったが、途中で北朝鮮が挟まっているので、私が生きている間にはそういうことを実際に調べることは不可能だろうと考えている。ただ、北海道にも赤くなるものがある。秋になったら気をつけて見ていただければと思います。

さて、いよいよキノコの話になりますが、人はなぜキノコの虜になるのでしょうか。美しい色や姿かたち、食べると美味しいものがある一方で猛毒のキノコもある。そんな不思議さに惹かれるのかもしれませんが。

シャグマアミガサタケという猛毒のキノコがあります。ゆがんだ脳のような形をしていておよそ食べる気にはならない形なのですが、学名に *esculenta* という綴りがあり、意味は食用。ヨーロッパでは何度も煮こぼして、毒抜きをして食べます。最近若い人たちが毒抜きすることを知らずに、サラダ感覚で生のまま食べてしまい、死人が出て問題になっているそうです。

センボンキツネノサカヅキは、20年前前に発見されたキノコで、私が本を出すときに大変お世話になられた旭川の蓑屋さんが見つけた、和名は蓑屋さんが名づけたものです。群生しているので、とても目立つはずなのですが、20年前まで名前すらありませんでした。キノコの奥深さを感じます。

キノコの栄養のとり方には3通りあり、生きている植物、動物、キノコに取り付けて栄養を吸収する方法が寄生。取り付かれた樹木は死んでしまうが、森林での本数調整をして、森林の更新に寄与しています。死んだ生物体に取り付けて、栄養を吸収する方法が腐生。落葉、落枝、樹木の木材部を元素のレベルまで分解し、元素は光合成の材料となっている。森林における物質循環のカギを握っている。生きている樹木の根にキノコの菌糸がまとわりつき、外生菌根を形成し、互いに栄養を交換するのが共生。森林の健全な生育が保障されます。

キノコは森の掃除屋さんと言われていますが、あれは間違いです。辞典で掃除を調べると、ごみやほこりを取り除くという意味の他に、便所の糞尿を

汲み取るという意味がある。我が可愛らしいキノコたちを汚穢屋とはなににごとか。キノコは、取り除いているのではなく、その場で分解しています。掃除ではない。キノコは森のコーディネーターです。我々は、キノコが森林の中でやっている色々なことのひとつを植林などで手助けしているだけなのかも知れません。

#### 質問コーナー

Q ツチアケビとナラタケの関係は？

A オニノヤガラは説明がつく。ナラタケからオニノヤガラに栄養を与え、花まで咲かせるが、ある時期が来ると、逆にナラタケがオニノヤガラの根を食べてしまう。ただ回りにできた小芋は攻撃しない。2～3年たって花が咲くまで栄養を与え続ける。ツチアケビもナラタケと一緒に生活しているが、詳しいことはまだ解っていない。

Q ベンテングタケを食べる地方があると聞いた。美味しいダシが出るとも聞いたが本当か？

A キノコの毒にも色々あり、ベンテングタケの毒は弱いほうの部類に入る。長野では、割いて干したものと塩漬けにしたものをソバのダシに使う。ベンテングタケやテングタケには、イノシン酸が多く含まれており、これはダシ成分。ただ、どんなキノコでも干したり塩漬けにしたりすれば食べられると言うものではない。

大変すばらしい講演を聞き午前の部を終わりました。昼食後はフィールドに出て研修する予定でしたが、雨が強く午後も引続きキノコの話をしていただきました。午前も午後も五十嵐先生を会員だけで独り占めというとても贅沢な一日となりました。

この日は敬老の日で、参加者の年齢を考えると、冷たい雨の中を引きずり回すには、ちと忍びない気持ちがあり、午後もお話を引き受けてくれた恒夫おじさんに大感謝。研修会のコーディネーターとして、ほっと胸をなでおろしたのであります。

コーディネーターはこうでねーとなあ、やっぱり。オヤジギャグ爆発。

## 野鳥から北の自然を学ぶ

—— 大橋弘一氏の記念講演から ——

荻野 裕子

晴天に恵まれた10月9日、午後一時半より20周年記念講演会を中央区かでの2・7の会場を満席にする103名もの大勢の参加者（会員42名、一般60名、道1名）に集まって頂き盛会の内に開催することができました。講演会は総務部部長三崎さんの司会進行により田村会長のご挨拶と講師紹介から始まりました。講師には自然写真家として執筆やテレビ、ラジオ出演でも活躍中で自然雑誌「faura（ファウラ）」の編集長でもある大橋弘一氏をお招きし「野鳥を通して知る北海道の自然」をテーマにお話して頂きました。終りに三人の方によるスズメ、野鳥撮影、エゾライチョウに関する質疑応答もあり、大橋氏の約一時間半の巧みなお話に参加者は最後まで熱心に耳を傾けていらっしゃいました。

記念講演会の準備は新年度に入り田村会長の大橋弘一氏への講師依頼からスタート致しました。当日の会場が満席になりましたのは、田村会長、春日事務局始め会員の皆様お一人お一人が各新聞社、道ホームページ、自然系団体、地域公共施設などに広報活動を積極的に努めて下さった成果であり、20周年事業を通し私達の会をより多くの方に知って頂くという目標も達成出来たのではと思います。当日は北海道新聞社の取材も入り翌日の10日朝刊札幌圏に記念講演会の様子が写真入り記事で掲載されました。また11月29日朝刊、「はなし抄」欄に大橋氏の記念講演内容が大きく紹介され更に多くの方々に私達の活動を知って頂くことが出来ました。下記に記念講演を録音し記録した物を与えられた字数にまとめ伝えさせていただきます。

### 野鳥を通して知る北海道の自然 講師 大橋弘一氏

北海道ボランティア・レンジャー協議会20周年おめでとうございます。10月ナナカマドの赤い実が大変目立つ季節となりました。約20年前横浜から札幌に来た私には本州とは違う自然の一端を都心で味わえるナナカマドに大変思い入れがあります。冬は白い雪の降るなかナナカマドにやって来るヒヨドリやツグミという見慣れた野鳥達をじっくり観察する機会を得ることができます。そういう鳥達の情景を見ると美しいなあと思い綺麗に撮影したい気持ちになります。私は雪国を代表する雪景色に映える赤い実のナナカマドを啄ばみに来る野鳥を撮影することから鳥が他の生き物とどうかわっているのか考えるようになりました。写真家である私には二つのテーマがあります。一つは日本の野鳥、一つは北海道の自然です。野鳥にしか興味の無かった私が北海道の自然をテーマに持ち自然全般の雑誌「ファウラ」の編集をやるようになったのは北海道新聞社出版「自然ガイド支笏・樽前」の仕事を



引き受けた事がきっかけです。自然雑誌「ファウラ」は北海道の自然を撮る優秀なカメラマンが力を合わせて作っている雑誌です。私が基本的に「ファウラ」の仕事でやりたいことは「面白い話」です。一般の方が関心を持ってくれやすい面白い話を沢山紹介するのが「ファウラ」の基本的なスタイルです。「注」（大橋氏は講演の中で面白い話の例えとして「ファウラ」13号から人間の世界共通のテーマ、環境、共生、省エネが見えてくる地衣類のサルオガセ、世界最大生物の菌類ヤワナラタケの話、野鳥の話ではオシドリ、オオルリ、ウグイスの生態の擬人化、ミソサザイ、ヤブサメの名の語源ヒヨドリと付いた地名の歴史的由来、ツルの翼の形から名付けた戦国時代の陣形、ハト、フクロウに対する古今東西の自然観の違いなど紹介されました。）

こういった面白い話を日々探し求めながら「ファウラ」という自然雑誌の仕事をしています。野鳥写真家として独立した時に困ったことは自分にとって北海道を代表する大きな存在のシマアオジなどの鳥が世間一般に知られていないことでした。さらに困ったことは自然環境が悪化し撮る野鳥がいなくなっているのです。この二つの困ったことから野鳥写真家という職業は環境保護にもかかわっていかねばならないという思いに繋がりました。そこで私のやるべき仕事は世間の人に野鳥のことを知ってもらう、それから野鳥を通して自然全体を知ってもらう、そのことが「ファウラ」の編集に繋がって行きました。今の日本の自然を知る観点、特に野生生物はレッサーパンダが立ったとかアゴヒゲアザラシが可愛いとか「かわいい」「きれい」「いやし」で終わってしまうことが多い、きっかけとしては構わないが、そこで終わってしまわないための活動をして行きたいと思っています。それが北海道自然雑誌「ファウラ」であり、こうして皆さんの前でお話をさせて頂くこと、テレビやラジオで自然の話をさせて頂くことが結局地球環境を守ろうということに繋がるのだと思います。私のやり方は例えば道路建設反対とか、ダム建設反対とか反発の来る拳を振り上げるやり方ではなく反発される方を含めて一人一人に自然の大切さ、自然のことを良く知ってもらうことで自ら地球環境のことを思ってもらく、これが私のスタイルだと思っています。皆様も色々な方の前でお話をされる立場と思いますが、ご参考までに一つ申し上げます。あらゆる生物のことを知るのは大変なことです。私の場合は野鳥でしたが、ご自分の得意な専門分野を一つ持って、そこから環境全体を見ていく行動は無理なくできることではないかと思っています。今日の表題は「野鳥を通して知る北海道の自然」でしたが、私は野鳥を通して野鳥をきっかけとして北海道の自然に対するこういう考え方を持っているというお話をさせて頂きました。

## 森づくりいろいろ回想

札幌市 顧問 大友 健

森に関心を持った理由として別にないが、日本が敗戦になり「国破れて山河あり」の言葉が日本の復興と共に森林資源が住宅復興に大量に必要との背景から復員学徒の一人として微力ながら頑張ってみたくて林業技術者の途に入ったのである。

森との付き合いがいろいろな部門から始まったのである。昭和 36 年に支笏湖付近に全国植樹祭造成の森が計画され「エゾマツ」の一大造林地が計画され、私は応援技術者として参加した。地主は国有林であり、天皇その他国会議員など多数の人々が参加するので支笏湖も遠望できるようにしてほしい旨。このことが耳に入り湖面側の天然林を伐採し、植栽地の笹の処理に入った。笹の根もとを素足でも歩ける位にきれいに作業を進めた。いよいよ植栽日が近くなり、主催者側は安心したかの様であった。しかし、愚かにも天然林を破壊してしまったので、植栽後の保育管理は大変であった。

国立公園内でもあり、不特定多数の人々が林内を歩きお手植えのエゾマツを眺めに来た。その人々から、害虫が発生している、緑の色が活力がないなどと言われた。その都度、当時の苫小牧道有林管理事務所は対策を実行せざるを得なく、薬剤散布などを実行、付近に作業をしてくれる人々を急に依頼することになって、その作業員をアイヌコタンより募った。アイヌの人々の働き方でしょうか、一部前金を支度金として渡さなければならなかった。四季の巡りもいよいよ寒さがますます初冬となり、寒風が湖面より吹きつけるようになり、稲藁(わら)を一本各に植栽木の先より下方に着けるようにした。稲藁帽子の樹木が目立ち、春を迎え、ようやく造林地らしい姿の成林の形に見えた。

その後は有名人の名札と共に盗掘され、何者かに盗まれるようになり代替の樹木を盗掘跡に植えつけたので大変であった。

今では、林内もうす暗く生育も順調でエゾマツ人工林約 10 ヘクタールが静かに森林の生態系をつくり安定した姿を見せている。

私は、森づくりを行政として個人、団体よりいろいろと依頼を受けて行ってきた生活環境保全林、砂防林などを思い出されるのである。行政からの転職により緑化会社に勤務替えしてからは街の公園作りも仕事と一緒にとなり、森林をとり入れた豊かな自然を造成したり、社有林の造成改良など楽しく仕事をさせてもらった。



## 20周年記念事業



「とっておきの一枚」写真展



講演会風景（かでの2・7）



会員研修会（ふれあい交流館）



講演会講師 大橋弘一氏



研修会講師 五十嵐恒夫氏



講演会風景（かでの2・7）

## 観察会・研修会スケッチ



観察会（ふれあい交流館）



富良野東大演習林研修（大麓山）



冬の観察会（野幌森林公園）



鵒川研修会（懇親会）



小樽支部観察会（小樽市有林）



オホーツク支部研修会（仁頃山）

## 植物とのお付き合い

小樽支部 北原 武

当会に入会して8年、佐々木幸夫顧問の懇切丁寧なご指導のもと、又、しばしば、奥様には参加者の立場で助言を頂きながら、近くの林道端で、初めて観察会を行ったのが、99年の5月、その時は、参加者募集方法すら分からず、家内友人にも来てもらい、漸く体裁を整えたものだった。

それから7年間、近郊の山野を何回となく歩いた。そして、未だに悩まされるのは、次々に出てくる植物の種名にどう付き合っていくかであった。当初来、あえて、種名に拘る必要はない旨の、先輩諸氏の説明もあったが、観察会を続ける内に、それはどうも違うと思うようになってきた。何故なら、参加者の多くは種名を知りたくて来ているのであって、それに70%位は答えられなければ、話が途切れてしまうのである。種名を覚える事は、この道の入り口であって、解説者と参加者を繋げるものは、先ずは種名であろう。それから先は、得手、不得手によって、道は幾つにも分かれてゆくように思う。不明な種に出くわした時、難しい質問に出くわした時、参加者に喋って貰えるようになれば、一人前といえよう。

あれこれと、種名を追いかけているうちに、その入り口だけで7年を費やし、未だに、そこから抜け出せないのが現状かもしれない。それなら、いっそのこと、種名だけで決着のつく分野が、外に無いだろうかと考えていた折、植生調査の話があり、同好の志数人で、手探りのにやってみたら、予期せぬもの、未知なものに、出会える事の面白さにひかれ、早、6年が経ってしまった。その際、小樽野草愛好会という組織をつくり、市博物館指導の元、会員15人程で植物採集と、さく葉作りを行っている。そして、成果品は博物館に寄贈し、当地域の植物基礎資料として、一般希望者の閲覧等にも供することとなっている。

以上、曲がりなりにも二又掛けて歩いているが、山は、何時行っても新鮮な姿を見せてくれる。坂道で、汗をながす事で体内が浄化され、その度、一年づつ寿命が延びていくようである。同時に人々が己をさらけ出して、話し合える場でもあると思う。古来動物は、植物無しでは生きられず、その意味では植物様々であって、これからも、できるだけ山野を歩いて、植物から何かを学びとってゆきたいものである。

当小樽支部も関係各位のお力添えのお陰で、略、安定した歩みが出来ようになりました。当会20年を期して、そろそろ、支部代表者交代の時期ではないかと思しますので、合わせ、一層のご指導をお願い致します。

(06, 11, 10)

## ボランティア レンジャー協議会 20周年について考える

富良野市 南部 栄一

自分が自然観察指導者「ボランティアレンジャー」の育成研修を受講したのは昭和62年の第2回で確か道南の大沼が研修会場でした。丁度、自然保護運動が活発な時代であり、横路知事の時でもあったので北海道版自然保護指導者の養成機関と錯覚して勇んで受講に向かったのを思い出されます。特にその頃から中高年の登山ブームが始まり、国立公園や日本山岳協会の自然公園指導員としての活動に自然破壊や荒廃に疑問や挫折を感じていた頃でもあったのでいよいよ北海道もその様な方面にも目を向けて、そのために動き出したとの思いで受講に向かいました。これは自分だけでなく初期の受講者の多くはその様な思いで受講を希望し期待して研修した方が大半ではなかったかと思ってます。そしてその頃は協議会にも受講者のほとんどの方が加入していたのでは？初期は個性的な方が多かつたし、それが活動の大半が今でこそアウトドアライフの中で認知されているが当時は自然観察と言う漠然としたつかみ所のない分野だったので、自然保護活動等に関心のある方は櫛の歯が抜けるようにボラレンから抜けて行ったと思います。その中でも自分と育成研修同期の故野月筆雄氏が元東大演習林長の「泥亀さん」と全道各地で始めた山川草木の会による植樹やその後の管理も今も南富良野町や富良野市で受け継がれているが当初も現在も協力者の大半がボラレン育成研修受講者であることは意義のある事と思えます。自分も南富良野町の「エジンバラ公の森」を見る度に関係者の1人として誇りに思ってます。この様な活動もボラレンでの研修、人脈が基になっているのでは？自分に関しては受講終了後もひたすら、北海道百名山、日本百名山に挑戦、休日は特に悪天で無い限り何時も何処かの山にいました。ただ、ボラレンだけはほとんど会費要員として在籍しておりました。その内、上川の会員研修「夜の」で野呂、宮田、室屋、沖館さん等それぞれの分野の素晴らしい方々と知り合い、更に停年を機に總會や富良野東大演習林での研修を通して自然観察の知識以上に、素敵で人間性豊かな魅力的な方々との出会いを楽しみに参加させて頂いています。今年は小樽支部の方々との交流、富良野岳は悪天のため残念でしたが楽しかったです。年も年だし出来るだけ皆さんの足手まといにならない様に思ってますが今後とも御指導よろしくお願ひします。そして、2007年も皆様にとって素晴らしい年であることを祈念しています。

## 自然解説員（インタープリター）として

札幌市東区 小泉 三雄

北海道が、豊かな大自然、自然の素晴らしさを多くの人々に理解され、自然保護や自然環境の保全に役立つことを目的に昭和61年（1986年）からインタープリターを育成した、先見の明のすばらしさに頭が下がります。私もその一員としてインタープリターを誇りに思い、一般の自然ガイドとの違いを意識し案内に当たっています。

＜ 以下 小泉流インタープリテーションについて ＞

### 自然解説員とは

- ・対象としているのは、自然環境にとどまらず「解説活動」に歴史や文化を含める。
- ・解説員としての自分のスタイルは、自分に最も相応しいものを各自が作りあげること、一流の解説員になる教程などはない。
- ・常に自分も学ぶ、努力なしに醍醐味を味わうことはできない。
- ・必要なのは献身と謙虚さ、人を愛する心と対応する場面ごとでの情熱である。
- ・参加者には常に個性や経験に違いがある、それを考慮に入れながら解説する。

### 参加者の個性

- ・一つの言葉を聞いても、同じ事実を見ても参加者の感じ方、発想、考え方など一人ひとり違う。参加者はそれぞれ違った経験をし、もっている知識、能力、そして感性が異なっているからである。

### 解説員の心構え

- ・解説員中心ではなく、会話しながら一緒に気づき、ゆっくり楽しむ。
- ・身近な言葉を使い、解説員の温かさ、自信、能力を感じてもらう。
- ・参加者に見通しをもたせ、期待と安心感を与える。
- ・気象歳時をくみ込み、おりおりの季節感（自然と人間の関わり）を味わう。



オオウベノリ

## 自然への想い

小山 賢一郎

はじめに

この会の結成20周年の歩みを想うとき、『歳月は人を待たず』との印象を強くします。多くの方々の支援と会員各位の努力への想いととも、標題について、その想いを述べます。

### ㊦、わが家の庭の植物（その自然）

猫の額ほどの狭い庭ですが、種を蒔いたり苗（幼樹）を植えた記憶がないのに生育している草本・木本類のあることです。その理由は、判然とはしませんが、風媒花・虫媒花や野鳥の仕業であろうと思います。では、具体的かつ簡単に述べます。

まず、ヨツバヒヨドリです。気付いてから今年で三年目。二年目の昨年夏はみごとに花を一杯につけ、さまざまな昆虫類がつぎつぎに蜜を集めにやってきます。とくに、クジャクチョウとタテハチョウの一種です。（図鑑でも確かな同定ができず、今後の宿題です。）

つぎに、ヌルデ（ウルシの仲間ですが、かぶれる心配はないとの判断から抜かずに生長を見守っています）、秋の紅葉がとても美しく、カメラで撮り、大伸しするのが楽しみです。このほかに、オニユリ、エゾムラサキツツジなど全く知らぬ間に増えています。他にもありますが、長くなるので省略します。

### ㊦、私の依拠する自然観（神の創造論）

それは、まず生物進化論（説）への疑問です。そして、生きとし生けるものにかかわる聖書のことば（聖句）による創造論（創造説）のことです。字数に限りがあり、創造論のみ（創造説の用語は以下略します）、聖書のことば（聖句）に依拠して述べます。『空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれどもあなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです』（26）。『一野のユリがどうして育つのか、よくわきまなさい。働きもせず、紡ぎもしません』（28）。『一栄華をきわめたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした』（29）。（新約聖書マタイの福音書6章（26）、（28）、（29）節。新改訳聖書による）

おわりに

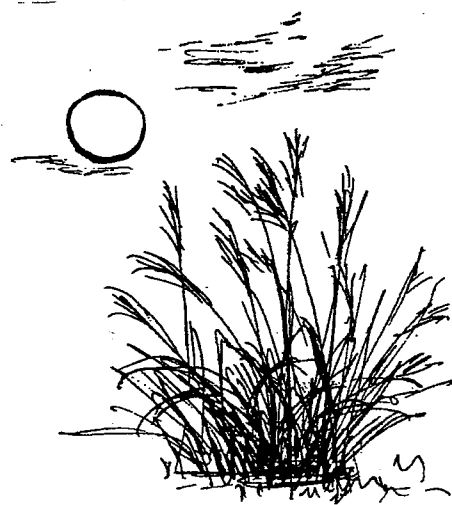
㊦について、確かな自然の理由はあるのですが、しばしばその説明には



「偶然」との意味がつかまとうのではないのでしょうか。聖書に依拠する創造論では、自然について、神の創造と干渉は「偶然」ではなく、「必然」ととらえます。

⊖について、生物進化論への疑問は展開しませんが、それは無用の混乱（論争）をさける想いからです。最後に、つぎの聖書のことば（聖句）をもって、私の自然への想いのむすびにかえます。『信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです』（新約聖書へブル人への手紙 11 章 1 節。新改訳聖書による）

以上



\*\* 研修部からお願い \*\*

来年度の研修の場として適切な場所がありましたら、研修部長の小林さんまで連絡をしてください。私たちの活動の場を広げていくためにも、みなさんからの提言がぜひほしいです。

## シギゾウムシのこと

苫小牧市 谷口 勇五郎

9月25日、安平川の河口から3km程、厚真の発電所の近くまで、札幌の人と海浜植物の調査をしていた時、海浜の少し草が生えているところに、一匹のゾウムシがいました。サンプルビンに入れて見ると、吻が非常に長いのでシギゾウムシと思いました。ゾウムシ科には、日本に1000種程度おり、その内シギゾウムシ類は約50種、絵合わせ的にコナラシギゾウムシと思いました。図鑑によると、「ナラ類の実に9月頃産卵する」とあります。

10月1日、ワシタカの探鳥会が室蘭のマスイチ浜であり、ノスリ・オオタカ・ハチクマなどを見ていた時、リーダーのAさんが、「ゾウムシだ」と声をあげました。



(実物大)

「どれどれ」と私、Aさんの腕を歩いています。ビンに入れて、「シギゾウムシですね」と言うと、Aさんはうなずいて、「図鑑に出ていた、エート」と「札幌の昆虫」のことで「コナラシギゾウムシですか」と言うと、「それぞれ」と言いながらビンを受け取り、「どうやってドングリに卵を生むんだろう」と言う。この長い吻と産卵の関係が分かりませんでした。帰って調べると、クリシギゾウムシ(本州)は、クリの若いイガを吻(先端に大顎あり)で穴をあけ、深い所に長い擬産卵管を入れて産卵するとあります。

5日、今度は一人でマスイチ浜に行きました。たまたま、近所の鳥に詳しい方やその地でよくワシタカを観察して人がおり、色々教えてもらいました。一人昼食後、転落防止柵に触れて、海を見ていると、腕に例のシギゾウムシが動いていました。飛べるか否か、背中をいじっても、全く飛べる様子はありません。腹を押しても腹端からは何もでません。柵に置いて、帰りの運転中、白老町萩野あたりで、左腕にその虫が歩いています。附着していたのですね。

ワシタカの渡りのピークは10月20日前後というので、もう一度行って見よう。それまでこの虫が生きていれば帰せると思いました。ミズナラの葉を与えて飼育を始めました。8日、葉を食べている様子がないので、ハチミツ液を綿に湿らせてふたをあけて見ると死んでいました。標本にしようと、手に取ると、前翅がバラリと広がり、後翅が見えます。引っ張ると横に折たたまれていたと見え、ずるずると前翅の2倍程の長さになりました。これなら飛んで樹上に行けると思えます。某道立博物館の学芸員に問い合わせると、吻で若いドングリに穴をあけ、産卵管は普段は腹の中であり、吻ぐらいの長さにして、産卵するとのこと。後翅を広げて標本にしました。

10日、錦糸峰川(市内白老寄り)岸の林でドングリを14個拾いました。容

器に入れて置くと、10日間程して、白っぽいウジ（体長7～10mm）が動いていました。ドングリに直径1,5mm程の穴があき、そこから出たのです。穴のあるものを割ると、黒い粉状で、ウジの糞のようです。まだ、少し実の残っているのも3個ほどあり、25日までに穴のないドングリは1個のみ、ウジは全部で32匹、1個当たり2,5匹になります。土を入れた虫かごに入れると、2～3分して土の中にもぐりこみました。シギゾウムシの幼虫と思います。

## 「閑話休題」

「ウドの大木」

佐々木幸夫

自然観察会を通して、正しい知識を参加された皆さんにお話しております。野幌森林公園に自生している「ウド」を見ますと、「ウドの大木」について、私の方から質問します。

「ウドの大木」の「ウド」は、この「ウド」ですか？。と、大抵の参加者はイエスと答えます。それは本当でしょうか。

手近にある国語辞典を見ますと、「ウド」は、ウコギ科の草本植物で山野に自生したり栽培され、また、薬用植物としても利用されています。

しかし、その草丈は2.5から3.0mも伸び、しかもその時の茎は中空ですから、「大男、総身に知恵が回りかね」と、男の愚鈍さを表徴するように説明されています。

さて、会員の皆さんはそのように理解されておりますか？。

本当は「ウドの大木」＝「ウドノキ」なんですよ。「ウドノキ」は、残念ながら北海道に自生していません。日本では小笠原諸島や琉球列島に自生し、「オシロイバナ科」の木本植物です。常緑樹で、高さ10m以上にもなる高木です。別名「オオクサボク＝大草木」ともいいます。何故ならば、この別名のよように、高さが10m以上になっても、鎌で刈り倒すことが出来るほど軟らかいので、普通、私たちが樹木であれば、柱や板などに利用されると思うのに、そのようなことが出来ないのです。

出典資料 日本野生植物（平凡社）  
樹木百話（日本林業調査会）

## 「子ども樹木博士」認定と、おもしろ森林もり遊び！

札幌市南区 小林 文男

はじめに

当センターでは新緑の6月、「ほんものの自然のなかで親子で森や木々の学習と森林遊び」をテーマに、第5回目の認定会を行いました。晴天に恵ま多くの参加者により盛大に行うことができました。

### 1 実施の目的

親子で森や木々の特徴やはたらきについての学習と、多様な森遊びのなかから、自然の面白さや大切さを学び、さらに興味を高めようと取り組みました。



### 2 実施の内容等

#### (1) 場所

森の中にはいろいろな木々や草花があり、多くの昆虫類が生息していることと、遊歩道やトイレ・駐車場等の整備されている北海道有林の真駒内保健保安林で行いました。

#### (2) 内容

①森のインストラクターによる森や木々のおもしろ話から、樹木博士認定まで実施。

②草花の観察と昆虫探しの森散策。

③森（林業）の道具を使っての森林遊び。

普段手にすることが少ない測高器や輪尺、木廻しガンタ等を使っての森遊びには、子どもも大人も一緒になって大賑わいでした。



#### (3) 参加対象

樹木博士認定の対象は子どもとし、大人も楽しめるように草花の観察等も組み込んだ内容とし、参加の対象は特に限定しないことにしました。

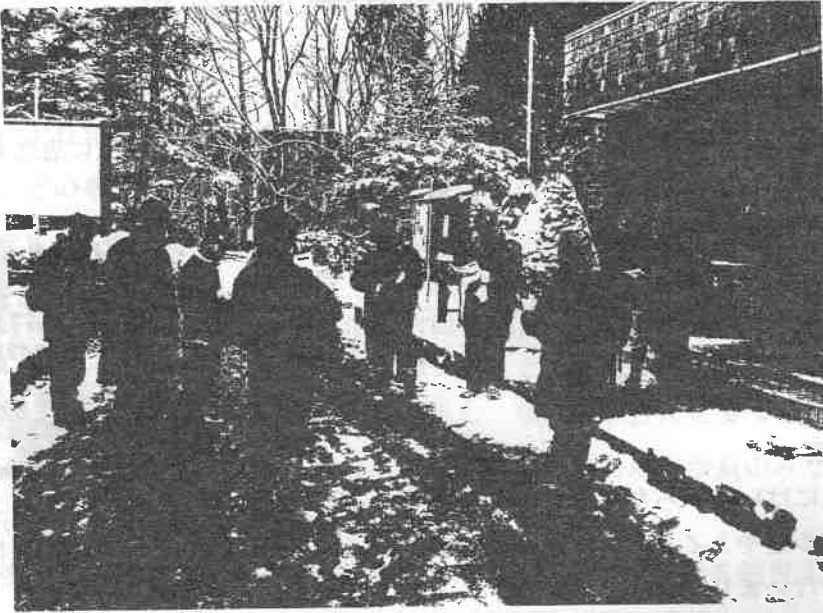
おわりに



一般への参加の呼びかけはNHKラジオ放送・各種新聞等による公募PRを展開しました。この結果、一般参加31名と実行委員11名での、大変な盛り上がりのなかで森の行事を楽しむことができました。

## 西岡水源地自然観察会 平成18年11月23日

参加者 ボランティア・レンジャー 11名、一般参加者 3名



天気予報では大荒れの予定であったが、昨夜来の風雪で雪が5cmほど積もっていたが、時々陽ざしがさす好天にめぐまれた。今村さんの挨拶で観察会が開始された。

この時期どのような観察会が行われるかたのしみであった、花や植物は休眠状態であったがその休眠状態の中でいかに樹木や植物を同定するか、その中でいかにテーマ(話題)を見つけるか、先輩たちの腕前を拝見することができた。一般参加者が少なかったのは残念でしたが、無事完了することができてよかったです。前回の野幌の観察会は暴風雨のため中止でした。

私の下見、西岡水源地を知るために9月23日に有明から白旗山、レクの森、西岡水源地まで縦走して、それ経路を地形図に、また、11月8日、西岡水源地の周辺道路、木道を地形図に記入しました。そのことで地理的に位置関係は理解できました。

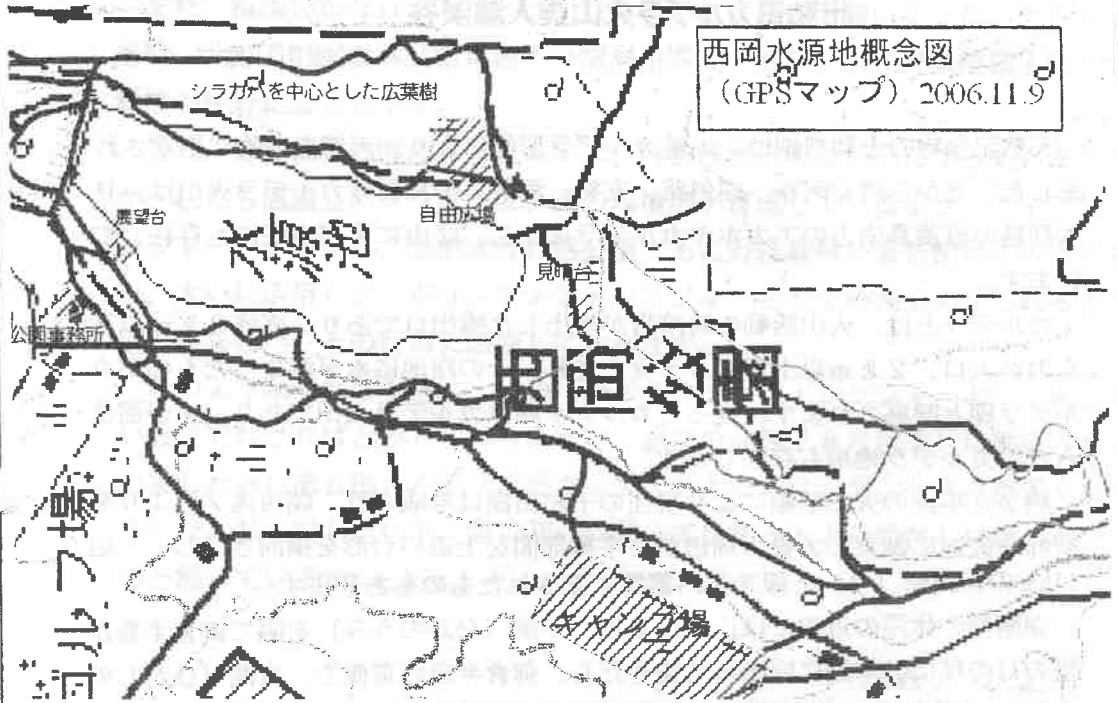
西岡水源地は木道が多く湿原の雰囲気を楽しめるので春のミズバショウや夏のトンボなど水源地の特色が出る時期にお参りしたいと思います。

ただひとつ残念に思うことは真駒内演習場の騒音で自然の雰囲気が破壊されている感じがします。野幌でも最近、島松演習場の大砲の騒音が聞こえるようになりました。

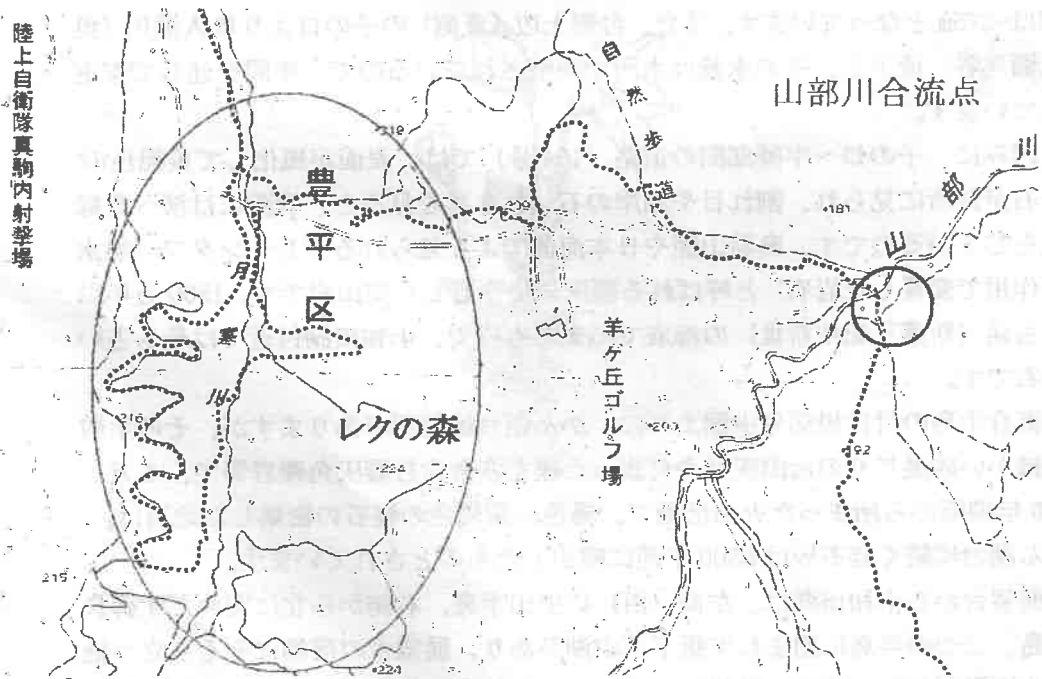
静かな森は言葉はいらぬ風の音、川の音、梢の鳥の声、雪がしんと降る森は最高です。

野幌森林公園をホームグラウンドとする今年の夏からボランティア・レンジャーに参加させていただいている。 札幌市厚別区 室野文男

水源地周辺の観察路（緑色が木道）



レクの森から山部川合流点付近の地図



※国土地理院のホームページから2万5千分の1地形図を閲覧、自然観察路はGPSを使用して記入しました。

ソフトウェアは花子を使用しました。

## 十和田カルデラ火山奥入瀬溪谷

成田 伸一

天然記念物の十和田湖は、二重カルデラ形勢により、天然記念物に指定されました。北から続く阿寒、屈斜路、支笏、洞爺、十和田等カルデラ火山は、日本列島の硫黄島南方のアカホヤカルデラ火山迄、32山に及び海底にも存在しています。

カルデラとは、火山活動の時溶岩が噴出した噴出口であり、直径2 km以下ものが火口、2 km以上がカルデラとされ、その窪地に水が溜まったものがカルデラ湖と呼称されます。従ってカルデラ湖はカルデラ火山であり、水が溜まらないカルデラ地形も存在します。

約200年前の火山活動により現在の十和田湖は形成され、湖西滝ノ沢より発荷峠を底辺に湖東の大豊岩周辺から宇樽部間を上辺の台形を横向きにし、一辺11kmの正方形(?)と観光案内書等に記されたものもあります。

湖南側の休屋の近辺には、中山半島、中湖(なかのうみ)を隔て御倉半島が蟹の目の様に二本湖に向かって突きだし、御倉半島の東側を、東湖(ひがしのうみ)、中山半島西側を西湖(にしのうみ)、湖北の広い部分は外湖(そとのうみ)で十和田湖は成立っています。外湖、東湖、西湖の水深は-25m~-100m、中湖は-375mとなっています。また、台形上辺(東側)の子の口より奥入瀬川(奥入瀬溪谷)流下し、その水量は水門で調整されているので、年間を通して安定しています。

因みに、子の口~宇樽部間の道路(104号)では、表面が風化して黄褐色の岩石が随所に見られ、割れ目や湖岸の石(れき)を見ると、実際には淡~濃緑色をしているのです。奥羽山脈や日本海側でよく見られるグリーンタフ(熱水の作用で変質した岩石)と呼ばれる凝灰岩や変質した安山岩です。1500年以上も前(新第三紀中新世)の海底で出来たもので、十和田湖付近では最も古い岩石です。

御倉半島の付け根部分中湖よりに、かん湖台展望所がありますが、その手前に細かい砂混じりの火山灰層や角張った礫を多数含む凝灰角礫岩等で、1万200年前頃から始まった火山活動で、褐色~黄褐色の軽石の密集した地層は、かん湖台に続く軽石層は8500年前に噴出したものとされています。

展望台から十和田湖は、左側(西)に中山半島、右側から北に突き出す御倉半島、二つの半島に囲まれて眼下に中湖があり、展望台の南側にそそり立つ絶壁の地層と共に、此処の展望にこそ、十和田カルデラ火山の生い立ちが見られます。

二つの半島を消すと、先述の台形となり、対岸の断崖は、十和田湖を取り囲む外側カルデラ壁（へき）で、その背後に御鼻部山（おはなべやま）で標高 1011 m、湖水面は標高 400m 丁度なので、湖水面からは約 600m です。湖の外縁周囲の山の急斜面は外側カルデラ壁で、激しい火山活動で数回も繰り返された膨大な火砕流の放出で出来たもので、その火砕流堆積物は、野辺地より南の青森県東部や、青森市から津軽平野南部、岩手、秋田県北部にかけて広がっています。その 1000～2000 年後に、カルデラ南半分で新しい火山活動が始まり、中湖の中程に頂上をもつ、溶岩の流出から始まった大火山（新期火山）が成長しましたが、その後、8500 年前の山体の上半分を吹き飛ばす猛烈な噴火発生、中心には長径 3 km 短径 2 km もの深い大穴（中湖）が作られた結果、湖の北半分の深さは平均 100m 前後に対し、大穴のほぼ平らな湖底（長径 1, 5km、短径 1 km）の深さは -375m にもなっています。残された中腹が、中湖を取り巻く中山半島と御倉半島です。御倉半島の湖岸には、縦に太い角柱を集めた様な断崖があり、これはデイサイトで断崖に囲まれた頂上付近は丸みをもった緩やかな斜面で安山岩、デイサイトによく見られる造山形状でここでは、溶岩ドーム（溶岩円頂丘）で大量の火山灰や軽石を噴きだす激しい火山活動の後に、地下の溶岩がゆっくりと押出されたもので、その出来事は、915 年頃（平安時代中期）とされています。

その断崖の南側の湖岸の崖には濃い赤色の地層があり、火山礫凝灰岩（ラピリタブ）で、五色岩という名で湖上観光の目玉にもなっていて、この地層は五色岩凝灰岩です。中島半島付け根休屋には、十和田神社があり有名な乙女の像があります。『雨降りしか水沫こりしかあわれいみじき湖畔の乙女ふたりむかひて何かを語る』大町桂月が歌った乙女の像の脇にある溶岩にも、急な冷却を思わせる割れ目がありこの黒い石は、玄武岩でこの溶岩が水中に噴出したため枕状溶岩となっています。これらの状況と、宇樽部段丘が示しているのは、湖面は今より数 10m 高く、新期火山の活動は水中で始まったと推定されます。

十和田神社は、大同 2 年（807 年）坂上田村麻呂の創建とされ、江戸時代には南部藩の霊場として多くの人々の信仰集め、境内裏山を登りきった処占場は、十和田湖誕生物語中の修験者南祖坊が中湖に入水した場所と伝えられています。

十和田湖東湖畔子の口より流出している奥入瀬は、溪谷を作り多数の滝、溪流と緑のハーモニーで、春の新緑から夏の緑陰、秋の紅葉にと人々が季節季節の訪れに集う。最近では、冬季の観光も盛んになってきているそう。

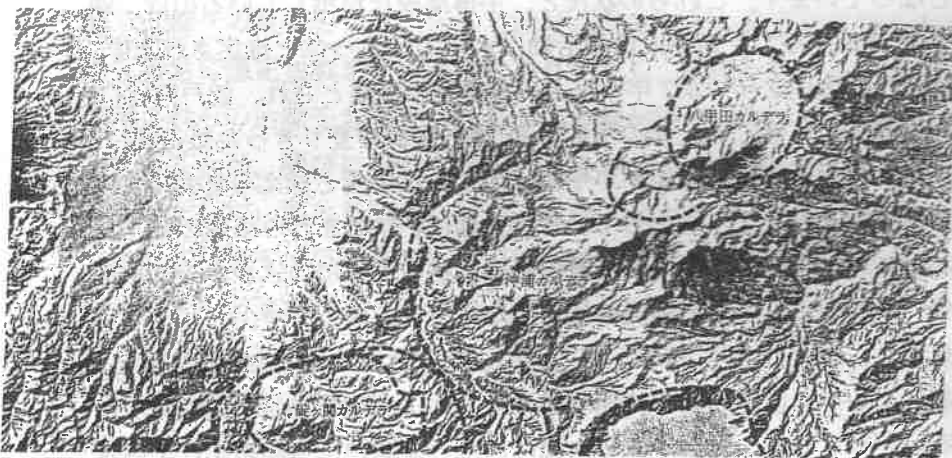
奥入瀬溪流は、子の口より 14km 下流の焼山までを散策コースとなっている。その上流部は、川岸に沿う道路の片側や対岸の大部は、絶壁が急斜面で随所に地層（岩石）が見えます。最初の銚子大滝は川幅いっぱい水煙を上げて数 m



落下滝で、九段、不老、白糸の滝と連続して左岸の高みより落ちています。これらの滝をつくる岩盤は一見堅そうで、規則的な割れ目（板状節理）が入っています。表面に地衣類がついて黒く見えますが、流水で洗われた部分や新しい割れ口を見れば明るい灰色なものと、一方の方向に岩片がのびて、縞模様があり、ルーペで観察すると、ガラスの破片の様な石英、黒くて細長い角閃石があり、このような特徴は溶結凝灰岩です。この地層は、北八甲田連峰、十和田火山の地下、青森市街地、七戸、十和田湖町一帯にあり、北八甲田連峰北側、十和田火山の活動前の65万～40万年の火砕流堆積物で、十和田湖より北北東約20kmの北八甲田側北東（田代平）の激しい火山活動で発生したものです。

白糸の滝の対岸、道路を越えた所の玉簾の滝は他の滝と異なっています。5mほどの高さより岩盤を細かく幾筋にも転がるように落ちる水は、玉転がしのようにも、簾をかけたようにも見えます。この簾を透かして見える地層は、薄く硬い黄色の粘土層と、厚さ数～20cm程度の暗灰色の砂の層が水平に交互に重なり合ったもので、その縞模様が目立ちます。この特徴は、湖の底に堆積した地層（湖成堆積物）特有なものです。滝の上の沢に溶結凝灰岩がのっているのです。その堆積後に高温の火砕流が発生し広がったことが解かります。この地層は子の口まで連続し、子の口周辺では砂礫層となり一括して子の口層と呼称され、十和田湖の南側や西側まで続き、かつて、古十和田湖ともいえる大きな湖があったことの証しです。

八甲田連峰、十和田湖のある奥羽山脈は陸奥湾の夏泊半島より足尾山地までの500kmもの日本最長の山脈で、北アルプスの100km、南アルプスの80kmと比較しても高度は最高峰、岩手山が火山、非火山は岩手、秋田の県界和賀山で東北日本の脊梁山脈で太平洋側のリアス式海岸、日本海側のグリーンタフと見所いっぱいフィールドです。北海道からも近く、時間的、経済的にも魅力のある場所です。



参考資料 「日本の地形」（東大出版） 「青森の自然」（青森地学教育研）

## <本の紹介> 北海道のキノコ学の集大成

— 五十嵐恒夫著「北海道のキノコ」(北海道新聞社発行)にふれて—  
広報部

9月18日、私たちの20周年記念事業の一環として、五十嵐先生には「北海道とキノコ」というテーマで貴重な講演をしていただいた。その数日前に北海道のキノコ学の集大成ともいべき渾身の著作を上梓された。先生は造林学、森林病理学の立場から菌類などを長年研究され、1988年「北海道のキノコ」(264種の解説)、つづいて93年「続北海道のキノコ」(266種解説)を北海道新聞社から出版してきた。今回は、新しく見つかった種をくわえて実に800種におよぶ膨大なものになっている。

この著作にも記されているように、北の大地に800種もののキノコが生息していること、それ自身、自然の豊かさを示していることである。私たちはこの豊穡な大地で生活していることを誇りにも思う。

そこで、この本の特色を素人の私なりにまとめてみる。

第一に、キノコを自然の生態系のなかで捉え、「森のコーディネータ」として位置づけていることである。キノコの役割として、樹木を枯死せながらも森林の更新をはかる寄生、落ち葉などの分解をする腐生、樹木との栄養を交換する共生などがある。

この共生の代表例の一つとして、最も人気のあるくハナイグチ>(ラクヨウキノコ)がある。美味しいキノコであるばかりか、今日、特に環境問題などではキーワードにもなっている「共生」という視点から捉え直してみることも興味深いことである。

第二に、収録された800種のキノコの写真、それぞれに見つけた場所と時が記載されている。一般のキノコの解説書などでは、写真はきれいであるが、場所や時などは載せていないものが多い。特に、年月日の記載などは全く欠落している。本来、物の存在(あること)などは場所・時間によって規定するのが一般的である。その意味で、本書では学問的にも規定してるといえる。私たちにとってくどこで・いつ>、そのことが想起されて、とても親しみが感じられる。

第三に、第二のこととも関連するが、長い期間をかけ、阿寒国立公園、石狩川源流地域、樽前山周辺、知床半島など各地をくまなく歩かれ調査、研究されている。その成果として、白くまんじゅう型で地中深くに偽根をもつナガエノスギタケの生態写真や1988年旭川で見つけたピンク色から美しいサンゴ色の大きな群生をもつセンボンキツネノサカズキなどが掲載されている。

第四に、キノコは食べられる、食べられない、食、毒といった二区分の案内

書が多いが、グレーゾーンにもふれ食不適、食毒不明といったいねいな区分がされている。

そこで、最後に私の感想を記してみる。

①ハナイグチ、ナラタケなどはとても美味しいが、なぜかあまり進化していなようにも思っていた。しかし、キノコなどの菌類は動物界、植物界と並んで最も進化したグループであることを教えられた。私自身あまりにも無知であったことを反省させられる。

②キノコは「森のコーディネータ」としてとても重要な役割をはたしていること。それと共に、個性的な妖精たち、その色彩の豊かさによって森全体がシンフォニーを奏でているようにも見えてくる。この本にも紹介されているムラサキシメジの大きなやや楕円形の輪、まさにエルフィン・リング（妖精の輪）と呼ぶにふさわしい。

また、1988年に旭川で見つかったセンボンキツネサカズキは、ミズナラの樹木の幹上にピンク色からサンゴ色の美しい大群生をつくり、口を開いて大気を吸い込んでいるようにも見える。ムラサキシメジ、センボンキツネノサカズキなどはとても美しい芸術的な造形をつくりだしている。

③共生という今日の重要なキーワードを担っているともいうべきハナイグチ、講演会でもふれていたが、明治の初期、信州からカラマツの造林のために移入された。その時、苗木に菌が付着していたと考えられる。カラマツ以外の樹木にはこのキノコはまったく見られないからである。私たちが好んで食べているハナイグチ、今日ではあまり食べる機会がなくなって残念だが、なんと遠くから時間をかけて、まさに時空を越えた旅をつづけて、この北の大地にやって来て生きつづけているとは。なんとロマンに満ちたキノコなんだろう。

なお、雑誌「Faura」に、先生のインタビュー記事「楽しいキノコ学」もわかりやすく参考にした。(S)

# 北海道のキノコ

FUNGI  
of Hokkaido

五十嵐恒夫

800種を収録したキノコ図鑑の決定版!

- ◆写真点数約1000点
- ◆オーソドックスな科別の配列で分かりやすく
- ◆タモギタケ、ホンシメジ、マツタケ、ツバナラタケ(ポリポリ)など注目のキノコ65種は解説文付きで詳しく紹介
- ◆和名には漢字名を添え、撮影場所・撮影日も記載
- ◆検索に役立つ形状マーク付き

北海道新聞社



# 自然観察NOW

野幌森林公園自然情報

2006.12.10 No.8

北海道ボランティア・レンジャー協議会

## 冬の森のメッセージ

冬の森の中は静まりかえり、ときおり森の奥から野鳥の鳴き声が聞こえてきます。林床も雪に覆われていて何も無いようですが、よく見ると色々と観察することができます。

### ◆野草等

雪の上に顔をだしている立枯れの穂先に種子が残っています。種によって、その穂先の形の違いがよくわかります。また、穂先を振ってみると種子がでてきます。種子の大きさ・形を比べてみるのもおもしろいでしょう。

- ・キンミズヒキ ・エゾシロネ ・エゾゴマナ ・オオアワダチソウ ・セイタカアワダチソウ
- ・エゾヨモギ ・メマツヨイグサ ・サラシナショウマ
- ・オシダ、イヌガンソク、コウヤワラビの孢子葉

### ◆樹木等

雪上に樹木の種子が落ちています。白い雪の上なので小さな種子もはっきりと観察できます。

- ・カツラ ・シラカンバやウダイカンバ ・シナノキ ・カエデの仲間

雪の中から常緑の葉をのぞかせている樹木もありますし、樹上にも目をむけてみましょう。

- ・エゾユズリハ ・ツルシキミ ・ヤドリギ（雄株か雌株か観察しましょう）

### ◆野鳥

冬の森で野鳥に出会うには、その日の天気によって左右されますが、運がよければ思いがけない野鳥に出会うことができます。

- ・シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ等の混群 ・アカゲラ、コゲラなどのキツツキの仲間
- ・ヒヨドリ ・シメ ・ウソ ・ムクドリ

### エゾフクロウについて

大沢コース沿いの大木の樹洞にヒツソリと2羽のエゾフクロウがいます。このニュースが知れ渡ったのか、散策コースを離れ、森の中に踏み跡が幾つもついています。公園内には3つの約束がありその一つに「散策路から外れない」があります。近くで見たいがため、コースをはずれることは、マナー違反です。

## 観察会情報

- 円山登山観察会 1月14日(日) 10:00~12:30 円山大師堂登山口 集合

冬の間は、どうしても運動不足になりがちです。運動不足解消を兼ねた観察会です。樹木の冬芽の観察ができます。また、シジュウカラ、ゴジュウカラなどカラの仲間やウソなどの野鳥、エゾリスの可愛い姿も見られるかもしれません。頂上からは札幌の町並みや遠くに夕張岳が望めます。下りは円山動物園横にてできます。

# エゾフクロウの嘆き

11月29日付けの北海道新聞に「エゾフクロウつがい仲良く」との記事が掲載されていました。冬の時期になると、公園内の何ヵ所かにエゾフクロウの姿が観察できます。その情報が伝わると、たくさんの人々がその姿を見に集まります。そして、時によってはカメラや双眼鏡の放列ができます。たしかに、エゾフクロウの姿やしぐさは可愛くて置物みたいなのですが、視点を変えて、エゾフクロウの気持ちを考えてみましょう。

……ぼくたちはエゾフクロウの雛、兄弟は全部で4羽、巣穴から出て10日目。このごろ人間がうるさくって、ゆっくり寝むられないんだ。空が明るくなり出すと現れて、僕らを探すんだよ。僕らを見つけるとなんだか大きな筒のようなものを僕らに向けてくるんだ。そいつはまあくて、目玉みたいに光っている。時々カシャカシャと鳴くんだ。僕らはお腹いっぱいになったし、とても眠たいんだけど、どんどん人間が集まって来るんだ。僕らの寝ている木の下で、わいわいガヤガヤうるさいったらありゃしない。時々手をたたいて寝ている僕らを起こすんだ。目を開けると、目玉みたいな筒がこっちを向いていっせいにカシャカシャ鳴くんだ。そういえば、四角い箱からは稲妻も出たりする。怖くはないけれど、あれはちょっとまぶしいなあ。……… ( B I R D E R 2005.9月号 鳥たちの波瀾万丈より )

多くの鳥は眼は球状をしていますが、フクロウの仲間筒状をしています。これにより、わずかな光りをできるだけ多く取り込むことができます。この結果、人間が見ることのできる光の10分の1~100分の1の弱い光まで見ることができます。また、聴覚もすぐれていて、耳の位置が左右対象ではなくずれていて、音の方向がよくわかり、さらに顔を縁取る独特の羽はパラボナアンテナの役割をしています。沢山の人の気配をしっかりとエゾフクロウは感じているのですから、ストレスを与えるような観察ではなく、心遣いのある観察をしていきましょう。

## 冬 至

12月22日は冬至です。冬至は太陽の黄経が270度の日で、一年中で一番昼の時間が短い日です。札幌地方の昼の時間は9時間で、夜の時間は15時間ですが、北へいくほど昼の時間がみじかくなり、北極圏から北では一日中太陽が出ない常夜です。

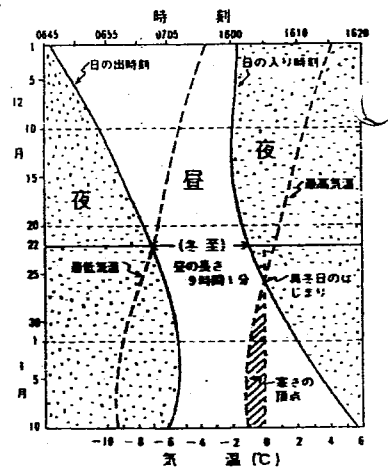
ところで、冬至の日は、一年中で日の出が一番遅く、日の入りが一番早いと思われがちですが、そうではありません。

22日冬至の札幌地方の日の出は7:03で、日の入りは16:03でして、一年中で一番日の出の遅い期間は12月29~1月9日の7:06で日の入りの早い期間は12月4日~12月15日の16:00なのです。

右図を見る通り、日没が最も早いのは12月初旬から中旬にかけてであり、「冬至十日前」とも言いわれています。

昔の人は、この冬至の日を「一陽来福の日」とか「太陽の誕生日」ともいって祝いました。冬至を祝う風習は世界各国にあって、北方民族ほどそれを大事にしています。

この日には冬至カボチャ、冬至コンニャク、冬至ガユ、ユズ湯等の風習がありますが、厳しい冬を乗り切るための行事のようです。



札幌の冬至前後の日の出・日の入り時刻と最高・最低気温(平年値)の変化

## 編集後記

- ・ 私たちの特別号に野幌森林公園事務所長の相馬博明さんに寄稿をお願いしました。多忙にもかかわらず心温まるメッセージをいただきありがとうございます。今後は管理面で難しいことも予想されますが、大都市の中に息づき、かけがえない野幌森林公園をフィールドに活動していきたい。
- ・ 多くの方々から原稿をいただいた。特に、このサークルを牽引してきた顧問の大友健さんからは、体調をくずし療養中にもかかわらず、私たちの運動を温かく見守られた貴重な原稿をいただきました。
- ・ 特別号の題字は、知人で書家の重住弘一さんに書いてもらいました。北の大地に雄雄しく育つエゾマツを片仮名で表現するのはとても難しかったようでした。
- ・ 例年の活動に加えて、20周年の特別行事をたくさん取り組んできました。詳細は本誌にレポートされています。内外にその力量を大きく発信してきたように思う。  
この活動を通して、わが会には多彩な多くの人たちがいることを知りあう機会にもなりました。今後は、これらの力を合わせて大きく活動の輪を広げていきたい。
- ・ 次回の「エゾマツ」第79号、春季号は1月下旬の発行予定で、原稿の締め切りは1月15日（月）までとします。多くの会員の投稿を待っています。なお、紙面を統一していきたいので、NO78号のp6を参照してください。

2006年12月13日発行  
エゾマツ 特別号  
会長 編集責任者  
田村 允 郁

